

氏名（本籍）	中村久美（京都府）
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博課第309号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	ライフスタイルからみた住宅計画のあり方に関する研究
論文審査委員	（委員長） 教授 今井範子 教授 上野邦一 教授 瀬渡章子 教授 清水哲郎

論文内容の要旨

地球環境問題に直面し、自然と人間の関係がどうあるべきかが問い直されている。人間の生命、活動を支える資源や生態系、環境の有限性の問題であり、次世代に引き継ぎうる持続可能な発展の重要性に迫られている。このような状況を呈するようになった背景には、大量生産、大量消費、大量廃棄の社会活動や人々のライフスタイルがある。地球環境問題は人々のライフスタイルに関わる問題であり、われわれのライフスタイルの変革が求められている。このような社会状況から、環境倫理につながるライフスタイルに着目し、環境倫理を規範とした住宅計画のあり方を検討するものである。

本論文は、7章から構成され、第I章が序論、第II章から第VI章までが本論、第VII章が結論である。まず、第I章の序論では、研究の背景、目的、住宅計画の変遷とライフスタイルの視点、研究方法、本研究における重要概念、用語の定義について述べている。

第II章「阪神大震災による住生活に関わる住意識の変化と住み方」では、阪神淡路大震災被災地域の住宅とその居住者を対象とする調査（有効サンプル数：610）から、被災体験は、自然や文明、モノと生活、人間関係、住生活上の価値観に触れる諸意識をゆれ動かし、その意識に少なからず影響を与えたことを把握している。多くの居住者が自然に対する畏敬の念や自然との共存を感じ、物の少ないシンプルな生活に価値をおくことの重要性を意識したことを明らかにするとともに、一方で、日常生活の復興とともに、これらの価値意識にもゆれ戻しがみられることを明らかにしている。

第III章「リビングダイニングの住生活における収納の問題と収納計画」では、近年、住宅平面形式において増加しつつあるリビングダイニング（LD）の住生活における収納の問題を切り口に、モ

ノと住生活の関係、モノと収納にかかわるライフスタイルを扱っている。過密による混乱を避けるため、誘導居住水準を考慮した規模水準の集合住宅とその居住者を対象とし質問紙調査（聴き取り調査併用、有効サンプル数：236）を行ない次のようなことを明らかにしている。LDには家族の食事、団らんをはじめとする多様な生活行為が集中する結果、極めて多様な生活関連のモノが、LDに集積することを明らかにし、そのモノの多様性に対応した住宅計画上の考慮がなされていないことを指摘している。さらに、住み手のモノの保有と整理に対する生活態度をもとに、数量化Ⅲ類によりライフスタイルの類型化を行ない、モノ、収納にかかわるライフスタイルは、単にモノ、収納に関わるライフスタイルとしてのみならずひいては環境倫理につながるライフスタイルであることを指摘している。

第IV章「住宅における収納空間としての屋外物置の実態と評価」では、国内全域の屋外物置をもつ居住者を対象に（有効サンプル数：2087）、屋外物置にあらわれた、モノと生活、それらに関わるライフスタイルを分析している。屋外物置は、住宅内のあふれだし品の収納、住宅内での収納空間不足、モノの多さを露呈したものであり、住戸内での収納空間の不足、それを補う空間として機能していること、一方で、資源ゴミ・リサイクル（ゴミ分別）のための一時収納や、季節外収納等に使用され、そこから地球環境問題に関連した新たな住宅収納の必要を確認している。環境倫理に根ざすライフスタイル構築のためには、こうした新たな収納空間を住宅計画において考慮すべきことを指摘している。

第V章「自然・地球環境との共生の住み方と住空間のあり方」では、住生活と居住者のライフスタイルから住宅計画のあり方を検討している。環境共生型集合住宅の居住者を対象とし（有効サンプル数：世帯票243、個人票368）、日常の住み方における自然との関係、地球環境を考慮した住生活の状況を、居住者のライフスタイルと関連づけながら分析している。自然の風や太陽光・熱をとりいれ調整して住むことを積極的に行っている世帯が一定数存在し、このような生活を営む世帯を構成する個人のライフスタイルをみると、時間的見通しを持って主体的に暮らす生活の仕方を志向している。さらに、彼らは省エネや省資源など、地球環境負荷軽減にかなう生活行動をとるとともに、季節感のあるしつらえなど生活に季節を取り入れることに非常に積極的である。以上のようなことから時間的見通しをもって生活する態度を、ライフスタイルとして定着させていく必要があることを指摘している。住宅計画においては、耐久性、維持管理のしやすさ、断熱性や気密性、風通しや日当たり、緑化や戸外生活を促す専有外部空間のデザインなどの計画における基本的要件を重視し、「季節を意識した」生活を支えるための開口部や空間構成への建築的配慮、住宅内空間に季節感を取り入れるための季節の演出空間の確保を指摘している。

第VI章「地球環境を考慮した住宅リフォームの実態とリフォーム観」では、一定の建築時期を経た、リフォーム経験のある独立住宅の居住者を対象（有効サンプル数：世帯票294、個人票526）とした質問紙調査による分析を行っている。それによると、風や光、熱といった自然の取り込み、調整のための空間計画や住宅材料へのこだわり意識を持つなど、地球環境への配慮につながるリフォーム観を有

する世帯が存在するものの、リフォームの際に生活の利便性や見た目の新しさにのみとられる世帯が少なくなかった。とくに自然への関わりへの意識が低く人工環境を好み、モノの消費志向の強いライフスタイルの居住者を中心に、住宅長寿命や自然環境との関係に対する意識が低い居住者層が存在することを明らかにしている。住宅の構造や建材、断熱・気密などの基本性能のみならず、自然の外部環境との関係からみた開口部のとり方など、「季節を意識した」生活を促し自然との応答性を考慮した住宅計画の重要性を提示している。

第Ⅶ章「結論」では、各章で得た知見をもとに、環境倫理を規範としたこれからの住宅計画のあり方に言及するとともに、今後の課題を述べている。

論文審査の結果の要旨

いまわれわれは地球環境問題に直面している。飛躍的に拡大した人間活動が自然を圧迫し、人口増加と経済成長が、地球規模に広がる環境汚染を招いている。大気汚染や水質汚濁、ゴミ問題などの身近な環境問題、地球温暖化やオゾン層の破壊といった地球環境問題は、人間の個々の日常生活と密接に関わる問題である。このような状況を呈するに至った背景には、大量生産、大量消費・廃棄の社会活動や人々のライフスタイルがあり、このような消費的なライフスタイルを根本から変革しなければならないことは、共通の認識として存在する。科学と文明の恩恵を受けた人間中心の生活を改め、自然、地球環境への配慮を優先し考えていく必要がある。このような状況から本論文は、地球の有限性、自然の権利などを柱とした環境倫理に基づくライフスタイルに着目し、環境倫理を規範とした住宅計画のあり方を検討しようとするものである。

本論文は、7章で構成され、得られた成果の主なものは次の通りである。

(1) まず、自然に対する意識、モノとの関わり方や豊かさへの生活意識に大きな影響を与えた阪神淡路大震災の被災地域の居住者調査から、自然やモノに対する意識の揺れ動きと地震防災を考慮した住み方の状況をとおして、自然と人間生活との関係、モノと生活との関係の再考の必要性を指摘し、住宅計画における環境倫理の視点を導き出している。

(2) 住宅内でモノが集積するリビングダイニング(LD)における住生活と収納の問題をとりあげ、そこに集積するモノの多様性に対応した収納方式を可能にする柔軟な収納計画のあり方を提示している。さらに、数量化Ⅲ類により、モノと収納に関わる4つのライフスタイル類型を抽出し、その中の「モノの保有にこだわらずモノから解放されたいとする」ライフスタイルを、環境倫理につながるライフスタイルとして注目している。

(3) さらに、屋外物置にあらわれたモノと生活の関係を分析した結果、屋外物置は住宅内からのモノのあふれだし、住宅内での収納空間の不足、ものの多さを露呈したものである一方、資源ゴミ・リサイクル分別のための一時的収納、季節外収納などの利用を明らかにしている。資源ゴミの一時収納のための空間、後述する「季節を意識した」生活を支える季節外収納のための空間など、環境倫理に基づくライフスタイル実現のためには、今後の住宅計画において、それらに対応したゆとりの収納空間の必要性を指摘している。

(4) つぎに、自然環境・地球環境と住生活との関係について、環境共生型住宅の居住者を対象とした調査から、自然の風や太陽の光や熱を取り入れ調整して住むことに積極的な居住者が存在すること、このような居住者のライフスタイル特性として「時間的見通しを持って主体的に生活する志向」

をもつことを明らかにしている。彼らは、省エネや省資源など、地球環境負荷軽減にかなう生活行動をとるとともに、季節感のあるしつらえなど季節感を住生活の中にとりいれることに積極的であることを見出している。自然と共生する住生活の原点として「季節を意識した」生活を導き出し、自然と応答性のある住生活を支えるための住宅の開口部・緩衝空間、住宅計画における季節の演出空間の重要性を提示している。

(5) 自然環境、地球環境に関わるライフスタイルについて数量化Ⅲ類を用い、モノの長期使用－短期使用、自然環境志向－人工環境志向の2軸を解釈、3つのライフスタイルに類型化を行い、そのなかで環境倫理にそった「モノの長期使用・自然環境志向」のライフスタイルは、「季節を意識した」生活との関連性が高いこと、さらに住宅リフォーム観においては、「自然の風が通り抜ける住まいにする」「太陽による光や熱が調整できる住まいにする」「庭や屋外に緑と関わりあう住まいにする」といった自然を取り込む建築計画に対する意識の高いことを検証している。環境倫理の視点から重要と考えられる住宅計画の指針として、余裕の空間の重要性、住み手の積極的な季節の住みこなしに応える住空間の柔軟性、外部の自然環境との関係を意識させる空間計画、以上の3点を指摘している。

(6) 住生活や住まいの営みに関して、人間存在の基盤であるはずの自然や地球環境の有限性への認識と、それとの共生を優先して考える立場から住宅計画を考える必要性を提言している。

本論文は、モノや自然・地球環境との関係からみた住生活の実態を明らかにし、その基盤となるライフスタイルを抽出し、環境倫理の観点から望ましいライフスタイルをとらえ、それを規範とした住宅計画のあり方を提示している。そのライフスタイルを促すための住宅計画の指針を検討したものであり、深刻化している地球環境問題に目を向け、地球環境の有限性を見据えた住宅計画の必要性を提起している。

戦後日本の住宅計画は、生活と空間との対応関係を重視した機能主義に基づき、さらに住様式という文化的視点を加えた流れを主としてきた。機能性、快適性の追求に先立ち、環境倫理を規範とした住宅計画が求められ、本論文は環境倫理に基づくライフスタイル変革にむけて、今後の住宅計画に新しい視点をいれたものとして評価される。

これらの成果を、日本建築学会、日本家政学会において口頭発表（計5回）、その内容を日本家政学会に投稿し、合計4編の審査論文として採択され、評価を得ている。

よって、本論文は、奈良女子大学博士（学術）の学位を授与されるに十分な内容を備えていると判断される。